

英文学植物考

加藤さだ 著



英文学植物考

加藤さだ 著



名古屋大学出版会

加 藤 さ だ

明治37年 三重県に生まれる。

昭和3年 同志社大学文学部英文学科卒業。

昭和12年 ミシガン大学大学院入学、翌13年 MA。

昭和16年春まで同大学院博士課程に在学。第二

次世界大戦直前に帰国。帰国後は、同志社女子

専門学校、同志社女子大学、同志社大学、南山

大学、松蔭女子学院大学の各教授を歴任。

昭和60年3月 没。

イギリス・ルネサンス文学，とくにシェイクスピア，

ミルトンに関する論文多数。

英 文 学 植 物 考

1985年5月10日 初版 第1刷発行

定価 5,800円

著 者 加 藤 さ だ

発行者 井 関 弘 太 郎

発行所 財団法人 名古屋大学出版会

〒464 名古屋市千種区不老町名古屋大学構内

電話 (052) 781-5027

振替 名古屋2-11638.

印刷・製本 日大印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©Sada Kato 1985

printed in Japan

ISBN4-930689-31-7

ま え が き

イギリスでは「3月の風と4月の雨が5月の花をもってくる」というとおり、百花咲きそろうのは5月である。ばらが最も美しいのは夏で、ミルトンは一番美しいものに ‘summer’s rose’ をあげて ‘spring’s rose’ とはいわない。

アメリカの秋は大きなかつ葉樹が落葉して **fall** というにふさわしいが、イギリスはキーツのいう ‘mellow fruitfulness’ のシーズン、すなわち実りの秋である。野をあかく染める小麦の刈り取りも8-9月で、じゃがいも、りんご、梨などの収穫期がそれにつづく。緯度は樺太なみでも、寒さはそれほどでもなく、時には師走に匂いすみれが紫の花を薫らせ、すいかずらが咲き残っていたりする。こういうわけで日本の季節感ではイギリスの植物は律しがたい。

そのうえ、とまどうのは植物の名である。たとえば、**licorice** は辞書にかんぞうと出て、これはゆり科のやぶかんぞうの類であるが、チョーサーのリコリスはまめ科の薬用植物であった。また、**chestnut** はわれわれの食べる **sweet chestnut** ばかりでなく、地味な栗の葉や花とは大違いの豪華な花や葉をもつ **horse chestnut** (マロニエ) が、しばしば単に **chestnut** とよばれる。

また、土地によってよび名が異なる場合がある。いとしゃじんといって細い茎の先に1, 2輪青い花の咲くのを、イングランドでは **harebell** というが、スコットランドでは **bluebell** という。イングランドで **bluebell** というのは、1本の茎にいくつかの鐘形の花が1列に並んでつく植物で、別名を **wild hyacinth** という。したがって、**wild hyacinth** はわれわれのいうヒヤシンスの野生ではない。

よび名は、また、時代によっても異なり、16-7世紀の **heliotrope** は **turn-sol** (向日) 性のひまわりやマリゴールドを指すので、香水の原料である香り高い紫の小花ではない。

さらに、花には風変わりな俗称があり、パンジーには ‘heart-ease’ (憂さ晴らし) のほかに ‘Kiss-me-John-at-the-garden-gate’ (ジョンさん、庭の入口でキスしておくれ) という長い名もあり、べんけい草の類には ‘Welcome-home-husband-though-never-so-drunk’ (こんなに酔ってるのは滅多にないが、旦那さん、ようお帰り) という珍名がある。

本書に収めたのは文学作品に出る植物ばかりである。記述の方式は、第 I 章から第 IV 章までは多くの植物名がかたまって出る作品を軸とし、第 V 章では個々の作家に散発的に出るものをとり上げる。いずれの場合でも、各植物については広く用例を多くの作家からも引用する。重複を避けるため、一度取り上げた植物は、次からは省略する。したがって、たとえばシェイクスピアはたいていの植物に関連するから、独立したシェイクスピアの項だけでなく、インデックスを参照されたい。

本書では現代作家まで個別に取り上げるつもりであったが、紙幅の都合でロマン主義作家で一応終わることにして、それ以後の作家作品に初めて登場する植物についての記述は割愛した。

本稿をまとめるに当たっては、植物分類学の権威北村四郎博士のお世話になったし、また、オックスフォードのボドレイ図書館ではシェイクスピア関係、およびルネサンス時代の稀観資料の参照を許されて益すること多大であった。

本書の出版は名古屋大学の特別な御好意によるもので、名古屋大学出版会の井関弘太郎教授、文学部の川崎寿彦教授の絶大な御尽力によるもので深く感謝する。特に川崎教授には終始細かい心くばりをしていただきお礼の申し上げようもない。また、厄介きわまる原稿の整理から校正、インデックス作製等に至るまで、名古屋大学の山田耕士氏、愛知県立大学の磯野守彦氏等到大変な御面倒をおかけし、これまた感謝に堪えない。なお、本稿の起草に当たっては、松柏社主森政一氏の御好意にあずかったことを申し添えたい。

昭和59年 7 月

加 藤 さ だ

目 次

ま え が き	i
I Robert Bridges, 'The Idle Flowers'	
のイングランドの野草	1
II Michael Drayton の草木づくし	85
(1) イングランド中南部の草木	
——『ポリオルビオン』, XV.149-89	86
a 女婿の装い 86 / b 花嫁 Isis の装い 100 / c 花嫁らの	
通路の撒き草 112	
(2) 各種の頭飾り——牧歌『詩神の楽土』, V. 53-84	120
(3) 魔の草, 毒草および薬草	
——『詩神の楽土』, V. 199-246と『ポリオルビオン』, XIII.	
200-34	142
(4) 臭い, 嫌なもの——『詩歌の楽土』, III. 271-92	162
(5) 農作物——『ポリオルビオン』, XX. 45-60	170
III Francis Bacon より	189
(1) 庭に植えるもの	
——「庭園について」(<i>Essays</i> , Everyman's Lib., pp. 137	
-43)	190
(2) 農場に植えるもの——'Of Plantations' (pp. 104-6)	254
IV William Browne の牧歌草木づくし	265

V	その他の作家	297
(1)	William Shakespeare より	298
(2)	Edmund Spenser より	344
(3)	Ben Jonson より	358
(4)	Geoffrey Chaucer より	374
(5)	Robert Herrick より	380
(6)	James Thomson より	393
(7)	その他の17-8世紀の作家より	400
(8)	ロマン派詩人から	412
参 考 書 目		425
索 引 I	Plant Names (植物名)	427
索 引 II	Proper Names (固有名詞)	438

I Robert Bridges, 'The Idle Flowers'
のイングランドの野草

優雅な長詩 *The Testament of Beauty* (『美の遺書』) の作者として、また John Milton (ジョン・ミルトン, 1608-74) の詩形の精妙な分析により、桂冠詩人としても有名な Robert Bridges (ロバート・ブリッジズ, 1844-1930) に 'The Idle Flowers' (「仇し花」) という詩がある (*New Poems*, 23, *Poetical Works*, Oxford, 1964, pp. 351-4)。これはわずか84行だが、この中で何と83種の植物を歌っているという極めて異色ある作品である。しかもこれらの植物はイギリスの山野で最もなじみ深い、ありふれたものだから一層おもしろい。そこでこの詩全体をまず一読して、それから一つ一つの植物について述べることにしよう。

THE IDLE FLOWERS

I have sown upon the fields
 Eyebright and Pimpernel,
 And Pansy and Poppy-seed
 Ripen'd and scatter'd well,

 And silver Lady-smock
 The meads with light to fill,
 Cowslip and Buttercup,
 Daisy and Daffodil;

 King-cup and Fleur-de-lys
 Upon the marsh to meet 10
 With Comfrey, Watermint,
 Loose-strife and Meadowsweet:

 And all along the stream
 My care hath not forgot
 Crowfoot's white galaxy
 And love's Forget-me-not:

 And where high grasses wave
 Shall great Moon-daisies blink,
 With Rattle and Sorrel sharp
 And Robin's ragged pink. 20

「仇し花」

私は蒔いた、野に原に
 アイブライトにピンパネル、
 またパンジーやけしの種子
 熟し切ったをよく散らし

 また銀色のレディー・スモックは
 牧場を光でみたせよと。
 カウスリップにバタカップ
 デイジーそしてダフォディルも

 キングカップにフラードリ
 沼地に出会うは
 コンフリーに水はっか
 ルース・ストライフ、しもつけそう

 流れの畔り一帯に
 忘れまいと気をつけた
 クローフットの白銀河
 愛のわすれなぐさもまた

 また長い草など揺れる辺
 大ムーン・デイジーが瞬くよ、
 ラトルや強烈なソレルとか
 ラゲド・ロビンの桃色も。

Thick on the woodland floor		森の下地にかたまって
Gay company shall be,		陽気な仲間がいるんだよ。
Primrose and Hyacinth		プリムローズやヒヤシンス
And frail Anemone,		そしてひよわいアネモネも
Perennial Strawberry-bloom,		多年生なるいちご花
Woodsorrel's pencilled veil,		ウッドソレルの手描きの被衣
Dishevel'd Willow-weed		おどろおどろのウィロ・ウィード
And Orchis purple and pale,		紫や白のオーキスも、
Bugle, that blushes blue,		青くはにかむビューグルや
And Woodruff's snowy gem,	30	またウドラフの雪の珠
Proud Foxglove's finger-bells		威張ったフォクスグローブの指鈴や
And Spurge with milky stem.		乳ふく茎のスページも。
High on the downs so bare,		君が好んで登るという
Where thou dost love to climb,		あんな裸の丘高く
Pink Thrift and Milkwort are,		桃色スリフト、ミルクウォート
Lotus and scented Thyme;		ロタスや香るタイムあり、
And in the shady lanes		また陰深き小径には
Bold Arum's hood of green,		いかついアラムの緑帽、
Herb Robert, Violet,		ハーブ・ロバート、花すみれ
Starwort and Celandine;	40	スターウォートにセランダイン、
And by the dusty road		埃まみれの道傍に
Bedstraw and Mullein tall,		ベッドストローに背高ミュレン
With red Valerian		赤バレリアンに壁土塀にさく
And Toadflax on the wall,		トード・フラックスともどもに
Yarrow and Chicory,		ヤローや色ではたぐいなき
That hath for hue no like,		チコリにそれからサイリーニ
Silene and Mallow mild		色香程よきマローとともに
And Agrimony's spike,		アグリモニーの尖り穂も
Blue-eyed Veronicas		青い瞳のペロニカや
And grey-faced Scabious	50	灰色面のスカビアス

And downy Silverweed
 And striped Convolvulus:
 Harebell shall haunt the banks,
 And thro' the hedgerow peer
 Withwind and Snapdragon
 And Nightshade's flower of fear.

And where men never sow,
 Have I my Thistles set,
 Ragwort and stiff Wormwood
 And straggling Mignonette, 60

Bugloss and Burdock rank
 And prickly Teasel high,
 With Umbels yellow and white,
 That come to kexes dry.

Pale Chlora shalt thou find,
 Sun-loving Centaury,
 Cranesbill and Sinjunwort,
 Cinquefoil and Betony:

Shock-headed Dandelion,
 That drank the fire of the sun 70
 Hawkweed and Marigold,
 Cornflower and Campion.

Let Oak and Ash grow strong,
 Let Beech her branches spread:
 Let Grass and Barley throng
 And waving Wheat for bread;

Be share and sickle bright
 To labour at all hours:
 For thee and thy delight
 I have made the idle flowers. 80

また和毛なすシルバ・ウィード
 縞模様なるコンボルビュラス
 ヘヤベルは土堤のあちこちに、
 生籬ごしにさしのぞく
 ウイズウィンド、金魚草
 ナイトシェードの怖い花。

ひとは蒔かないところだが、
 私はあざみを植えている。
 ラグウォートや硬いウォムウッド
 のび放題のミニョネトも

ビュグロスに嫌なバードック
 とげある長いティーゼルも
 ひからびた干茎になってしまう
 黄色や白のせり科の草。

蒼白いクロラも見えますよ。
 お日様好きのセントーリ
 クレンスビルにシンジャンウォート
 サンクフォイルにかっこそう

お日様の火をのんじやった
 もしゃもしゃ頭のたんぼぼに
 ホークウィードにマリゴールド
 コーンフラワー、キャンピオン

かしわやアッシュは強くなれ
 ぶなは枝葉をはれよかし
 芝も大麦も群れ茂れ
 波打つパンの小麦もだよ。

ピカピカ光れ、鋤や鎌
 いつでも働けますように。
 君と君のたのしみに
 あだし花をば作ったよ。

But now 'tis Winter, child,
And bitter northwinds blow,
The ways are wet and wild,
The land is laid in snow.

坊やよ、でももう冬なんだ。
きびしい北風が吹いてるよ。
道ははじめじめ、うらさびれ
国土はすっぽり雪の中。

Eyebright (l. 2) (図1)は、こごめぐさ類で学名 *Euphrasia officinalis*, 花言葉を 'cheer up' (元気をだせ) という。別名 *euphrasy* はギリシアの美の3女神 (Three Graces) の一人で、喜びの象徴である *Euphrosyne* にちなみ、眼病の薬になるといわれた。ミルトンの *Paradise Lost* (『失楽園』), XI. 414 に禁断の果を食べたためにアダムの眼がかすんだが, *euphrasy* と *rue* で浄めて癒ったと記されている。15 cm 程の小さい草で緑の小さい葉の中から紫と黄の縞の入った白い花の咲くところが、パチッと開いた眼のようだというので **eyebright** という名をもっている。



図1 eyebright

Pimpernel (l. 2) (るりはこべ *Anagallis arvensis*) の紅花は *scarlet pimpernel* という。John Clare (ジョン・クレア, 1793-1864) の 'April' (「四月」) (*The Shepherd's Calendar* (『羊飼いの暦』) (*Selected Poems*, Everyman's Lib., p. 85) (単に *Poems* と書く場合は *The Muses' Library* による) に

Pimpernel, dreading nights and
showers,

Oft call'd 'the shepherd's weather-
grass,'

るりはこべ、夜と夕立を怖れるため、

「羊飼いの晴雨計」としばしばよばれる。

That sleeps till suns have dried the grass,	これは日輪が草を乾かし切るまで眠り、
Then wakes, and spreads its creep- ing bloom	それから起きて、這い伝う花を開くが、
Till clouds with threatening shad- ows come—	雲が怖ろしげな影と共にくるまでのこ と。
Then close it shuts to sleep again :	その時花はピンととじて再び眠る。
Which weeders see, and talk of rain ;	これを草とりの人達が見て、雨の話を する。
And boys, that mark them shut so soon,	そしてそんなにすぐ閉じるのをみる少 年達は
Called them 'John-go-to-bed-at- noon.'	この花を「ジョンは正午に寝床入り」 とよんだ。

雨が近いと朝でも閉花するので 'poor man's weatherglass' (貧乏人の晴雨計) ともいう。花の色には紅の外、ピンク、肉色、青味がかったものなどある。

Christina Rossetti (クリスティーナ・G・ロセッティ, 1830-94) の 'Sing-Song' は、この花の紅を主題に歌う。

Rosy maiden Winifred,	ばら色の乙女ウィニフレッドが
With a milkpail on her head,	おつむに乳桶のつけつつ、
Tripping through the corn,	麦の畑をチョコチョコ通リゃ、
While the dew lies on the wheat	露は小麦にのっている。
In the sunny morn.	お日様輝く朝のこと。
Scarlet shepherd's-weatherglass	赤い羊飼いの晴雨計(るりはこべ)が
Spreads wide open at her feet	その足許にぱっと咲く
As they pass ; ...	彼女の足の通る時。

Alfred Tennyson (アルフレッド・テニソン, 1809-92) の 'Maud' (「モード」) (*Poetical Works*, Oxford, p. 280) の中の歌に

The white lake blossoms fell into るりはこべ牧場にまどろむころ
the lake

As the pimpernel dozed on the lea! 白き湖の花、湖に散りこぼれぬ。

と、るりはこべの花の早く閉じる様を詠じている。

この草は古くは薬草として血色をよくするといわれた。近代に至って、腎臓や肝臓の薬となった。これは1年生の5-6弁の花だが、ほかに多年生の bog pimpernel (*Anagallis tenella*) という、草丈は短いが鈴形のかわいい花をつけるのや、blue pimpernel (*Anagallis caerulea*) といって青花で一寸変わったのもある。花言葉は 'change' (変化), 'assination' (会見の約束)。



図2 pansy

Pansy (1.3)(図2)の内 wild pansy は1年生の野生三色すみれ (*Viola tricolor*) で、花言葉は、'pleasant

thoughts' (たのしき想い), 'remembrance' (追憶), 'Think of us' (私達のことを思って下さい) という。W. H. Davies (W・H・デイヴィズ, 1871-1940) が 'In a Garden' (『園で』) で 'Cat-eyed Pansies with their velvet skin' (びろうどの肌で猫の目をした三色すみれ) (*Complete Poems*, 1936, p. 562) というが、白黄紫の斑らの花は山野に自生して種類もかなり多い。園芸用のものは garden pansy とよばれる。Mountain pansy (*Viola lutea*) は多年生で、wild pansy よりも少し花が大きい。

花言葉の 'thought' (想い) はパンジーの仏語 *pensé* に由来する。William Shakespeare (ウィリアム・シェイクスピア, 1564-1616) の *Hamlet* (『ハムレット』) IV. v. 176-7 で物狂いのオフィリアが 'there's pansies, that's for thoughts' (三色すみれなの、これは想いのためよ)

というのはこれである。

Wild pansy は別名 **heart's ease** ともいう。17世紀の名詩人 Robert Herrick (ロバート・ヘリック, 1591-1674) の 'To Pansies' (*The Works, The World Classics*, p. 78) という小曲は、この花言葉が枕になっている。

I'll leave thee, and to <i>Pansies</i>	あなたをすてて、パンジーのもとへ行
come;	きましょう。
Comforts you'll afford me some:	君なら慰めを幾分くれるだろうね。
You can ease my heart, and doe	君なら私の心を楽にして、愛の神では
What Love co'd ne'r be brought	とうてい出来そうもないことをしてく
unto!	れるわね。

また, **love-in-idleness** という名もある。シェイクスピアの *A Midsummer Night's Dream* (『夏の夜の夢』), II.i. 166に

It [Cupid's bolt] fell upon a little	〔キューピッドの矢〕が西国の小さな花
western flower,	におちました。
Before milk-white, now purple with	昔は乳色, 今は恋の傷手で赤紫ですが。
love's wound,	
And maidens call it love-in-idle-	それを乙女は ^{ラブインアイドルネス} 三色すみれとよぶのです。
ness.	

といっている。バックは妖精王オベロンの命令でこの花を探す。このしほり汁を眠っている人の眼につけると、眼を開いたとたんにもみた人をぞっこん好きになる。このいたずらで妖精の女王はロバの首をつけられたボトムに夢中になるし、ハーミアという美女に恋焦がれていた二人の青年が突如別の女ヘレンを追いかけて出すという珍事がおこる。*The Taming of the Shrew* (『じゃじゃ馬馴らし』), I.i. 156 にも 'love-in-idleness' は恋のまじないとして出る。ルセンショと言う男が 'I found the effect of love-in-idleness' (このまじない草の効験が見えた) という。同じ花は『夏の

夜の夢』, IV.i.76 で Cupid's flower とよばれている。

Edmund Spenser (エドモンド・スペンサー, 1552?-99) は *Faerie Queene* (『仙女王』), III.i.36; III.xi.37 ではこれを 'paunce' とよび, *The Shepheards Calender* (『牧人の暦』) の「四月」, 142では 'pretie pawnce' といっている。

Robert Greene (ロバート・グリーン, 1558-92) の *A Quip for an Vpstart Courtier* (『成り上がりの宮廷人諷刺』) (*The Life and Complete Works*, The Huth Lib., XI, 214) では 'There buded out the checkred (Paunsie) or partly coloured heartes ease, an herbe sil-dome seene, either of such men as are weded to shrewes or of such women that haue hasty husbands.... I learned that none can weare it, be they kinges, but such as desire no more then they are borne too, nor haue their wishes aboue their fortunes.' (縞模様の〔パンジー〕すなわち複色の三色すみれがほころびた。がみがみ女と結婚している男や、短気な旦那をもつ女共には滅多に見つかりっこない草だ。…生まれついた以上を望まぬ人、自分の分際以上の欲をもたぬ人以外は、王者たりとも何人にせよこれを身につけることはできないことを知った。) とこれは大変な花らしい。

パンジーにはほかに, 'three faces in a hood' (頭巾の中に三つの顔) とか, 'Cull me to you' (貴方のため私を摘んで下さい) とか, 'herb-trinity' (三位一体草), 'pink of my John' (私のジョンの精華) とか, 'Jump-up-and-kiss me' (跳び上がってキスしておくれ) とか, 'Kiss-me-John-at-the garden gate' (ジョンよ庭の門でキスしてネ) という様なおもしろい名がある。W. H. Hudson (W・H・ハドソン, 1841-1922) の 'A Shepherd's Life' (『羊飼いの生活』) (Everyman's Lib., p. 114) に 'Kiss-me-John-at-the garden-gate' を 'Sometimes called pansy' (時にパンジーとよばれる) と注釈している。

Poppy (I. 3) (図3) (けし *Papaver*) の花言葉は 'consolation' (慰め) で、麦畑や路傍に野生している。イギリスで一番親しまれているのは野げし = ひなげし = ぐびじんそう (*Papaver rhæas*) で corn-poppy ともいう。

花茎には毛があるが、実にはない。テニソンが 'Aylmer's Field' (「エイルマーの畑」) (*Poetical Works*, Oxford Standard Poets, p. 133) に 'The land of hop and poppy mingled corn' (ホップとけしの入りまじる麦畑) と歌い、デイヴィズが 'The End of Summer' (「夏の終わり」) (*Poems*, p. 590) という詩に

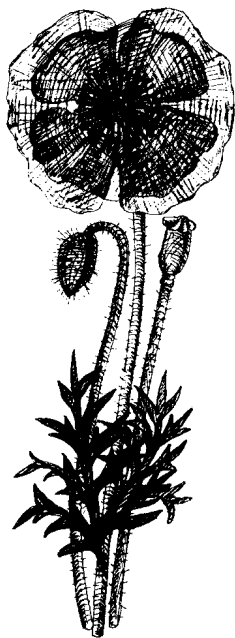


図3 poppy

Since from her side the corn is
ta'en,
The Poppy thought to win
some praise;
But birds sang ne'er a welcome
note,
So she blushed scarlet all
her days.

そばから麦が取りのけられて

おほめ
賞讃をうけるかとけしは思った。

でもてんで小鳥も歓迎の調べを歌
わないので
けしは一生赤くなって羞じた。

と歌っているように、けしは麦畑につきものである。麦畑の中や横に真赤なぐびじんそうが群れ咲いているのはなかなか風情があるが、農夫には実益のない代物である。E. M. Forster (E・M・フォースター, 1879-1970) の *Howards End* (『ハワーズ・エンド』), XLIV の一節に

The meadow was being recut, the great red poppies were reopening
牧場は再度刈られているところだった。
大きい赤いけしが庭にまた咲いていた。